

青山学院大学の宣教

新型コロナウイルスによる緊急事態宣言を受けて

見よ、私は新しいことを行う。
今や、それは起ころうとしている。
あなたがたはそれを知らないのか。
確かに、私は荒れ野に道を
荒れ地に川を置く。

イザヤ書43章19節¹

序 文

青山学院大学宗教主任会は新型コロナウイルス拡大を防ぐ緊急事態宣言（2020年4月7日～5月25日）を挟みながらも、教育現場で宣教活動を継続した。その未曾有の混乱の記録（2020年3月～8月）をここに項目ごとに掲載する。お読みいただければ初期の見通しの甘さ、朝令暮改、情報共有の不徹底、不安と混乱が見て取れることだろう。ベテランも新人も関係なく同じスタートラインに立たされ、日替わりの問題に直面した私たち。今日、十分準備した計画が翌日には無意味となり、リセットして立ち上がる中に漂う無力感。突貫工事のオンライン授業・会議で「できるか、できないか」とか「やりたい、やりたくない」ではなく、「やるしかない」と言い聞かせて進んだ日々。いつこの状態が終わるのか、平常に戻れるのか。いや、そもそも平常とは何なのか。お互い「今は異常事態であり、やがて平常に戻る」と言っていた。しかしその平常は、かつてのそれではもはやあり得ないことは、少しずつ誰もが分かり始めていた。

1 『聖書 聖書協会共同訳』、日本聖書協会、2018。

キリスト教は500年おきにパラダイムシフトを強いられるのだろうか。500年目（コプト教会をはじめとする東方諸教会の枝分かれ）、1000年目（東西教会分裂）、1500年目（宗教改革）、そして2000年目を迎え世界は感染防止のために人々が集うことを禁じ、キリスト教の礼拝行為もその対象となった。教会も大学も一気にオンライン礼拝にシフト、ITの力によって時空を超えた宣教の働きを選び始めた。神の言葉は閉じ込めることも、つなぎ留めておくこともできない（Ⅱテモテ2：9）²。

私たちは今も立ち止まることが許されず、右往左往しながら走り続けている。その道のりを振り返って評価する余裕も能力もない。ただこの半年の記録を、後日読んでもらえるよう書き残すことは可能である。いまだ十分に練られた文章ではないかもしれない。しかしそのこと自体が2020年の現実、どこにも正解が見つからない、経験則が通用しない、手探りの現実を映し出している。この特集の中に単なる人の言葉ではなく、神の始めた「新しいこと」、「荒れ野」に敷かれた「道」、人知を超えた次世代のビジョンを、賢明な読者なら見出していただけると信じている。

大学宗教部長 塩谷直也

2 「この福音のために私は苦しみを受け、ついには犯罪人のように鎖につながれています。しかし、神の言葉はつながれていません。」

目 次

序文 塩谷直也

- 1) 緊急事態宣言を受けるまでの宗教センター ～発信文書を通して 塩谷直也
- 2) オンライン礼拝全般 伊藤 悟
 コンテンポラリー礼拝 シュー 土戸 ポール
- 3) キリスト教理解関連科目 左近 豊
- 4) 宗教センター 所属4団体
 A. ACF（青山キリスト教学生会） 吉岡康子
 B. 聖歌隊 藤原淳賀
 C. ハンドベル・クワイア 大宮 謙
 D. ゴスペル・クワイア 福嶋裕子
- 5) キリスト教推薦会～経済学部への対応を中心に 大島 力
- 6) オンライン聖書研究会の可能性 高砂民宣
- 7) 宗教センター発行メールマガジン 森島 豊
- 8) 青山学院の各部の礼拝・聖書メッセージの発信に関して
 —幼稚園・初等部・中等部・高等部— 大島 力

1) 緊急事態宣言を受けるまでの宗教センター ～発信文書を通して

塩谷直也

(解説)

3月から4月は諸行事・計画が軒並み変更、修正、中止となった時期であった。この時期に宗教センターから次々と発信された諸文書中、最も重要だった「新型コロナウイルス感染防止に関するお願い 1～4版」を時系列に掲載する。大学宗教部長名として発信されたこれらの文書は、ほどなく感染拡大は終息を迎えるだろうとの予想で始まったが、時とともに事態は悪化、それに対する困惑と判断の揺らぎが文面にも現れることとなった。補足は脚注で示す。

①新型コロナウイルス感染防止に関するお願い

宗教センターに関する皆様へ

2020年3月17日

大学宗教部長 塩谷直也

2020年3月17日（火）より4月20日（用）まで、宗教センターに関連する諸活動の原則を以下とします。³

「すべての活動において、狭い空間での長時間の至近距離の会話を避けてください。そのために①隣を空けて着席、②常時換気、③2時間以内で終了、④手洗いの徹底をお願いします。」以下、個別に説明します。

宗教センター4団体⁴、推薦会などの活動

極力メール、ズームによる会議をお願いします。どうしても集まる必要がある場合は原則を守っていただき、指導者同席のもと行ってください。

3 この時点では前期授業開始日が4月21日に延期設定されていた。その後、大学から「5月1日に授業開始日変更」（3月30日付）が発表される。

4 大学宗教主任会がチャプレンを務める、宗教センター直属の団体。4章を参照。

ACF) 原則を守ったうえで役員会はできますが、全体企画は避けてください。

21日(土)の総会は、集会室ABCで上限30名(出席議員を各学年代表に絞る、ズーム使用など工夫してください)でお願いします。本部礼拝堂は換気が難しいので避けてください。

聖歌隊、ゴスペル、ハンドベル) 原則を守ったうえで役員会などは可能です。

練習に関しては、チャプレンと指導者との十分な協議のうえ、各団体の責任において行ってください。談話室はドアを開けた形でお願いします。本部礼拝堂は換気が難しいので避けてください。

推薦会)⁵ 責任を持つ宗教主任の監督の下、原則を守って行ってください。

3月25日(水)を中心とする学位記配布について⁶

間島3階ラウンジは開放しますが、占有使用はできません。原則を守るために、全員3階から退出していただく時間を作りますので、ご協力ください。祈祷はよいのですが、スピーチ、賛美など、式典性を帯びるものはご遠慮ください。9時～17時の利用となります。

新入生対応⁷

4月1日(水)9:00から予定されていたキリスト者推薦生へのオリエンテーション⁸は中止となります。原則に従い、各学部の推薦会で、4月1日～20日までに独自に(青山・相模原キャンパスに)集まってオリエンテーションを行ってください。新入生への連絡先は宗教センターに集約されています。

5 各学部で行っている「キリスト者推薦」で入学した学生たちの組織。学部ごとに当該学部の宗教主任のもと、独自の運営を行っている。5章を参照。

6 3月13日付で学長より学位授与式(卒業式)中止が公式に伝えられ、当日は学位記配布のみとなった。

7 3月6日付で同じく入学式の中止が伝えられた。

8 本学独自の「キリスト者推薦制度」によって入学した1年生に対し、入学式当日の午前9時から行われる新年度最初の重要行事。開催を求める声が強く第2版では規模を縮小した案が出される。

礼拝に関して

当初予定されていた4月7日からの大学礼拝は20日までなくなりました。⁹その代わり、その間の10回の礼拝説教を文書、もしくはビデオで配信する予定です。すべて宗教主任が担当します。詳細は今週中に決めてご連絡します。ご準備ください。

なお、状況の変化に従い、上記の原則を変更する可能性があります。その際は、改めて連絡いたします。

以上

②新型コロナウイルス感染防止に関するお願い（第2版 抄）¹⁰

2020年3月19日

宗教センター4団体、推薦会などの学生活動

大学自体が学生活動の教室使用許可を出さなくなったことを受け、宗教センターも学生の健康を守るため3月23日（月）以降の部屋使用を無期限で停止します。極力メール、ズームによる集会をお願いします。（間島3階集会室ABCに関しては原則を守ったうえでの個人使用は認めます。）

新入生対応

4月1日（水）9:00から予定されていたキリスト者推薦生へのオリエンテーションは中止とし、規模を大幅に縮小した「祈りの集い」を開く予定です。¹¹また原則に従い、必要に応じて各学部の推薦会を4月1日～20日までに独自に（青山・相模原キャンパスに）行ってください。新入生への連絡先は宗教センターに集約されています。

9 この時点では4月21日（火）授業開始が予定されていた。また実際は4月6日（月）より配信は開始され、全11回の収録となった。

10 以下、第1版からの変更部分のみ掲載する。

11 この「祈りの集い」は第3版以降大幅な変更を強いられる。

③新型コロナウイルス感染防止に関するお願い（第3版 抄）¹²

2020年3月25日

新入生対応（重要）

学生証配布が青山（数日かけて）、相模原（4月1日のみ）と、両キャンパスで分散して行われることとなりました。よって4月1日（水）9:00～9:15「祈りの集い」はガウチャー礼拝堂で行い、ウェスレーチャペルに同時配信します。キャンパスごとに新入生、宗教主任、職員が分かれます。

この「祈りの集い」に参加できるのは新入生、各推薦会役員（教室への案内係を兼ねる 1～2名）、宗教主任、宗教センター職員のみです。職員の指示に従って着席してください。その後推薦会それぞれの「教室集会」（9:20～10:30 相模原は教室別途指示）に移りますが、原則に従い、必ず時間内に終えてください。学部長、宗教委員は、この「教室集会」から参加可能です。参加への誘いは宗教センターでは行いませんので、各宗教主任の判断・責任で行ってください。なお「祈りの集い」「教室集会」どちらも保護者は参加できません。また4団体のメンバーが、「教室集会」で4団体の紹介を希望する場合があります。もし不都合なければ（プレゼンする制限時間などの条件を出して）許可してください。10:30までにガイダンスが終わらない場合は、各学部の推薦会を独自に4月2日～20日までに行ってください。¹³

ただし、今後の状況の変化によっては以下を想定しています。¹⁴

12 文部科学省3月24日発表「①密閉空間②人の密集③近距離の会話 この三つが重なる状況を極力避けること」

13 以上の「祈りの集い」は宗教部長の判断により直前で中止を決定、関係者に周知された。

14 このような状況の変化を見越して違う企画を用意し、どちらになっても対応できるよう準備することは理にかなっている。しかし実際は、限られた人的資源で次々と対応を迫られる状況下、いくつかのオプション準備はメンバーの疲弊感を増すだけであったように思われる。踏み込んだ安全策を早めに決定したほうが、長期戦では有効だろう。（もちろんこの時点では1～2か月で問題は収束すると考えていたのだが）

1. 大学より、9:00～9:15の集会を避けるよう直近で勧告された場合。

ガウチャー礼拝堂に集まった学生を順次、教室に移動させます。「宗教部長メッセージ」は印刷しますので、各教室で朗読していただき、その「心構え」をお伝えください。

2. いわゆる「首都封鎖」の状況、学生証配布が中止となった場合。

登校自体が禁じられたと理解し、全キャンセルとなります。各宗教主任の判断で、メールなどで学生たちへのガイダンスをお願いします。「宗教部長メッセージ」は配信します。

④新型ウィルス感染防止に関するお願い（第4版）

2020年4月6日

対面授業再開日まで宗教センターに関連する諸活動の原則を以下とします。

「三つの密（密閉空間、密集場所、密接場面）」を避ける行動を徹底してください。すなわちすべての活動において、狭い空間での長時間の至近距離の会話を避けてください。そのために①隣を空けて着席、②常時換気、③2時間以内に終了、④手洗いの徹底をお願いします。」

また、以下を今後の議論の前提とします。

- 原則を踏まえ、全関係者に集会参加、登校、出講を拒否する自由を確保する。すべての人の健康を守るため、極力「移動させない」配慮をする。¹⁵
- 従来の方針（様子を見て難しそうだったら直近で予定変更）では現場が日々振り回され、関係者の多くが疲弊する結果を招いてしまった。よって限られた力を有効に使うためにも、余裕を持った方針（やや過剰と思える安心策を取りつつ、のちにそれが不要だったと批判されても可とする）へ転換、より

15 政府専門家会議4月1日発表「10人以上が集まる集会・イベントを中止、家族以外の多人数での会食をしない。」

必要な課題に、創造的に集中したい。¹⁶

宗教センター 4 団体、推薦会などの学生活動

4 団体、推薦会のつながりを保つための「宗センメルマガ」が前期中、不定期で発行される予定です。情報提供などご協力お願いします。

またそれぞれの推薦会、4 団体で運営の工夫・アイデアがありましたら、ぜひ共有してください。

礼拝に関して（重要）

5 月 1 日（金）からの前期授業は「遠隔授業」のみとなりました。礼拝は対面授業（通常授業）再開と連動します。よって従来の礼拝堂に学生を集めて行う礼拝は前期中、朝夕ともにすべて停止します。それに伴いチャペルウィークを含め、全礼拝でお呼びしていた外部講師すべてをキャンセルします。

1. 21 日（火）～30 日（木）の大学礼拝は引き続き「今日の聖書の言葉」に変わります。週報はありません。録画連絡がいきますので、ご協力ください。

2. 5 月 1 日（金）～8 月13 日（木）の前期15 週は宗教センター主導により礼拝もしくはオルガン演奏中心のメディテーションを配信します。以下の大枠を考えています。¹⁷

i) 負担の軽減を考えてほとんど編集しないままのチャペルでの通常礼拝を配

16 注 7 参照。この段階で方針を変更した。

17 実際この i) ～iv) は大幅に変更、修正せざるを得なかった。（詳しくは次章「オンライン礼拝全般」を参照。）2020 年初頭には予想もしなかった全礼拝オンライン化に直面し急速方向性を示したものの、宗教センターが持っている収録機材、その時点での各メンバーの IT に関する知識と技術力（各自何ができて何ができないか、できないなら何で代用できるか）を明らかにしない限り、それは理想で終わったのかもしれない。一つ一つの現実を冷静に受け入れて初めて、最も効果的な対応が可能なのだろう。

信。従来通りの30分近い礼拝の生配信は種々のリスクが高いため、礼拝内容（プログラム）については時短型とし（讃美歌の節や説教時間などを検討し、基本の形、タイムフレームをつくる）、一週間前倒した録画を行っていく。つまり5月1日（金）配信予定部分を、一週間前の4月24日（金）の10:30からオルガニストを交えて撮影を開始（リズムを作るため、この録画時間帯は原則変更しない）。1週間の配信準備期間を経て5月1日に配信。このスタイルで行くと、8月6日（木）に撮影終了。

- ii) 短大・大学（相模原・青山）で1つの統一礼拝の動画を前期授業期間の月～金に配信する。できれば第1週（4月24日～5月1日）は青山で撮影、翌週（5月4日～8日）は相模原で撮影。これを交互に繰り返す。これで青山、相模原の各宗教センターが「撮影の週」と「編集・配信の週」というサイクルで動くこととなる。ただし、オルガニストの希望キャンパスや説教者のスケジュール組みが上手くいけばということであって、それぞれの撮影場所にどの宗教主任とオルガニストがいくかは今後調整。状況によっては自撮りを送信、すでにある音源でBGMを作るという方法も可。以上を考慮され、宗教センターにおいては、青山4月24日までに、相模原5月4日までに録画環境を整備してください。

- iii) このスタイルで行くと、撮影が行われていない一方の礼拝堂では何も行われていないことになります。しかし撮影・配信に慣れてきたら、計画していた『オルガンと祈りのとき』を進行させ、別枠で配信を検討したい。¹⁸そうなると専属オルガニストの働きがほぼ従来通りとなります。

より形を変えてオルガン・メディテーションが実施された）。

- iv) 出講を控えるオルガニスト、説教者、宗教センタースタッフも出てくるところを考えると、状況によっては説教のみ、オルガン演奏のみ、聖書朗読のみの録画、録画時間の長短も起こりえますが、柔軟に対応します。「通常の完壁な運航を最初から期待せず、揺れが激しい低空飛行であっても目的地まで

18 これは礼拝堂自体を開放することがかなわず、全く行われなかった（後期より形を変えてオルガン・メディテーション実施された）

届くこと」¹⁹を良しとしましょう。前述したように自撮りデータを使用する状況も今後起こりえますが、それをオルガンと合わせて編集したりするには時間的技術的な限界があり宗教センターの負担が極端に大きくなりますので、現段階ではどちらかのチャペルに直接来て説教（司式も）をしていただき、それを毎日録画していきます。チャペルには関係者以外は入れません。

v) 説教者はすべて宗教センターが大学宗教主任で割り振りますが、こちらも慣れてきたら、外部講師を頼む予定です。²⁰

vi) 以上の内容を含んだ、かなりアバウトではありますが、週報を作ります。電子媒体中心ですが、教職員に配布、掲示用にいくらか印刷してもいいでしょう。この時期でも礼拝が行われていること、サイトで閲覧できることを公表します。²¹

青学史上初めての試みです。宗教センター職員、礼拝委員のみならず、宗教主任全員でかかわっていきます。²²

19 著者が、自分に言い聞かせていた言葉でもある。

20 後期のオンライン礼拝より大学宗教委員、また卒業生の牧師（首都圏以外に在住の牧師より、自撮りで録画を送ってもらう）の礼拝メッセージが実現している。

21 礼拝時に配ることもない紙の週報を作成することに意味があるのか意見は分かれた。しかし緊急時の礼拝状況を後世に伝える記録として発行を継続した。すべての活動がPC上の画面の中で展開する中、唯一画面から飛び出たアナログな紙面は、関係者にとって重要な支えの一つではなかったか。

22 この翌日に「緊急事態宣言」が出され、4月8日より学院は閉鎖された。急遽メンバー全員が仕事（道具）を持ち帰り、それぞれの自宅からリモートで連絡を取り合い、試行錯誤の中75回の礼拝を撮影・編集・配信していくこととなる。

2) オンライン礼拝全般

伊藤 悟

仮に4月以降チャペルでの大学礼拝ができなくなった場合、あるいは授業開始が遅れる場合にも、4月初頭から学生たちに何らかのメッセージを発信し続けることの必要性について話題となり、即座に数名の宗教主任と宗教センター職員が学院宗教部長・大学宗教部長両名の陣頭指揮のもと、その具体方策の検討に入った。3月12日のことである。3月16日に授業開始を2週間遅らせ4月21日からとする方向性が示されてからは、一気に動画制作・配信準備に向けて検討が進み、3月19日開催の大学宗教主任懇談会（Zoomによる）にて、4月6日～20日までの月～金曜、毎日3分のメッセージ動画を配信することが確認された。宗教主任が全11回のメッセージを担当することとし、すぐにスケジューリング、担当分担、編集工程の策定を開始された。

当初、動画制作について学内他部署に協力要請もしたが、どこも緊急対応に追われるなかそれは叶わず、宗教センター自前で進めることを覚悟した。名称は「今日の聖書の言葉～大学宗教主任による3分メッセージ」とし、メッセージは実質2分、全体構成3分と定めた。しかし動画制作の経験やスキルを持った者は職員の中に誰もおらず、動画世代の学生たちに観てもらえるクオリティまで到達できるのか先行きは不安に包まれていた。また収録機材も殆ど揃っていなかった。当初の撮影は私物機材を持ち込んでの対応をした。

「今日の聖書のことば」の収録は、ガウチャー記念礼拝堂にて4月2～3日に集中して行い、すぐに編集作業に入り6日からの配信に備えた。だが、4月21日から開始する授業はオンライン授業のみとする学内決定、政府の「緊急事態宣言」（4月7日～5月6日）発令、4月8日からの学院閉鎖通知が次々と発出されるなか、ガウチャー記念礼拝堂での継続収録が不可能になり、さらに4月21日以降もチャペルでの対面礼拝再開の可能性がなくなってきたことから、動画作成方法や編集工程の在り方をふりだしに戻して見直すことが迫られた。

4月5日に新たな前期授業期間が5月1日から8月13日までとすることが大学から提示されると、「今日の聖書のことば」に替えて、授業期間中の月～金曜日は12分程度の「オンライン礼拝」を全学生を対象として配信することが大学宗教部長より提起された。配信1週間前に無会衆礼拝をチャペルで行いそれを収録配信する計画が進行したこともあったが、緊急事態宣言や学院閉鎖はそれを許さなかった。宗教主任のメッセージ収録も、すべて自宅で自撮りするよりほかなかった。全員がそのためのスキルを身につけた。

難しい対応を迫られたのは、オルガニストや音楽指導者らの処遇であった。専任の教職員と異なり、礼拝を始めキャンパス・ミニストリーの大きな部分を負っているながらも、学院や大学の中での雇用身分は必ずしも安定したものではなく、制度検討途上であったこともあり、これを即座に調整するには困難を極めた。しかし本学の礼拝になくてはならない要素として、オルガニストの働きに依存するところが大きいことも明らかであった。オンライン礼拝のなかで礼拝音楽をどのように位置づけ、礼拝をどのように構築するかは重要な神学的課題であった。幸い数名のオルガニストが自宅や教会のオルガンを使って前奏や後奏の録音データを提供してくれた。その後、データ提供の可能なオルガニストをスケジュール配置し、1週間単位で演奏録音データを提供していくパターンがつくられた。その間に、オルガニストの処遇についての学内調整も進み、次第に豊かな礼拝音楽の環境が整えられた。

「今日の聖書のことば」の動画制作および編集は、わずかに経験のあった宗教主任がトータル・コーディネートを行って、動画全体のストーリー構築やバランス調整を行っていった。3分の動画を全19本作り上げる作業は、次第にスムーズに進むようになった。しかし5月1日からオンライン礼拝の動画を一人が作成していくには限界があった。またこの領域に詳しい方から、プロデューサーとエディターが同一人物であってはならず、そのやり方ではチェック機能が働かなくなるとの指摘を受け、特定の誰かに依存するのではなく、複数の者が役割分担をして、それぞれが役割責任を負っていく編集チームを立ち上げることにした。また、そもそもの使命を互いに確認し、宗教主任は礼拝説教と授

業準備と学生ケアに専念する環境を整えること、動画の撮影・編集・配信はもっぱら宗教センター職員が行うことでミニストリーの体制を整えるようにした。動画編集については、4月の在宅勤務期間中に二人の職員が新しい動画編集スキルを身につけて礼拝配信に備えた。必要な機材の調達も行った。録画データ管理、共有ファイルを使った礼拝スケジュール管理、テキスト入力、週報作成等々、礼拝動画作成チームによる協働作業が始動し、5月1日の前期授業開始とともに「青山学院大学・短大オンライン礼拝」の配信が始まった。

動画作成チームによる1週間（5回）分まとめた編集プロセスは次第に軌道に乗っていった。担当分担したことにより、それぞれのスキル・アップも目覚しく、試行錯誤を繰り返しながら動画クオリティも目に見えて向上していった。音楽データ、説教データ、テキストデータは公開週の3週間前までに提出、2週前の月曜日までに編集作業を行い、編集されたデータは4人の宗教主任が視聴して様々な角度から批評してコメントを作成し、優先順位をつけて編集担当が修正改訂の作業にあたった。それらの修正状況を確認・最終校閲を行ったのちYouTubeサイトにアップし、毎日午前6時に公開されるようタイマーがセットされた。さらに大学Webサイトの大学礼拝のページからアクセスできるようURLを設定する。このパターンを毎週繰り返し、「今日の聖書のことば」は全19回、「大学・短大オンライン礼拝」は前期75回分の動画が作成され、過去のものも含めてアーカイブ化してすべてをWeb上で視聴できるようにした。

「今日の聖書のことば」の平均視聴数124.1回であったが、授業が始まって「キリスト教概論」などでオンライン礼拝が紹介されるようになると、視聴者数は一気に増加した。画面を飛ばしながら視聴する者、数分だけ試し視聴する者、数回分まとめて視聴する者など、視聴スタイルは多様である。レポート課題のための視聴が視聴理由のかなりを占める。それでも前期の礼拝動画視聴回数はのべ89,759回を数え、チャンネル登録者数779、礼拝1回あたりの平均視聴数1196.8回（回数幅323～4103）、年齢層は18～24歳が83.5%であり、明らかに学生層であることがわかる。視聴時間帯は21時以降の視聴が圧倒的に多く、

次いで15-17時の視聴が多い。比較条件が異なるものの、平常時のチャペル礼拝の平均出席が270名ほどであることを考えると、オンライン礼拝のアクセス数が極めて多いことがわかる。好きな時間に視聴できることもあり、学生のみならず学院職員からも概ね好評であった。阪本学長がオンライン・メッセージの中で大学礼拝を奨励したことが契機となって、学内で広く周知されることにもなった。さらに校友や関係者が地方や海外から配信情報を知ってアクセスしているケースもしばしば見受けられた。

宗教主任・宗教センター職員が一丸となって礼拝を作り上げてきたことの意義は大きい。「編集作業」とはいえ、担当者は動画公開日より数週間前からその日の讃美歌・聖書・説教を繰り返し目にし耳にすることになり、大きな恩寵の中での編集作業となった。日々の礼拝にそれぞれの賜物を用いることができた。打ち合わせ・収録・編集に多くの時間を費やすが、コロナ禍で「期せずして」新しいキャンパス・ミニストリーの展開が始まった。

オンラインは物理的距離を気にすることなく本学礼拝に参加してもらうことができる。説教者・編集者・奏楽者の到底手の及ばないところで、つまり見知らぬ人々のもとにも福音が届けられていく。礼拝は集まること、集まらなければ礼拝できないという固定観念から、集まらなくても礼拝できることを学んだ。讃美歌を歌うこと、空間を共にすることはできないが、確実にメッセージは届けられ、福音に触れる機会となっている。学生たちから寄せられた礼拝視聴の感想を読むとそれがよくわかり、そこに深く聖霊が働いてきたことを信じられずにはいられない。

学生が礼拝動画の作成に参加することもキャンパス・ミニストリーや礼拝教育の観点からもじつに重要である。コンテンポラリー礼拝については別項目で述べられる。

コロナ禍のコンテンポラリー礼拝の実現

シュエ士戸 ポール

新型コロナウイルス対策のため、3月からコンテンポラリー礼拝関係の集いは全てオンラインに切り替えられた。青山学院大学コンテンポラリー礼拝の最も重要な目的は学生が霊と真理をもって心から神を礼拝することである。その礼拝の中心となり、奉仕するのが学生のワーシップチームである。火曜日の夕礼拝だけでなく、毎週、「賛美ランチ」といわれている火曜日お昼の集いも実施しているが、4月上旬からはその集いもオンラインで行われた。オンラインのコンテンポラリー礼拝を実施するために、学生は積極的に礼拝動画の作成に取り組んだ。

火曜日お昼の「賛美ランチ」の集いでは、一緒に賛美をし、聖書と祈りの時間を設けてから、礼拝動画作成のプロジェクトに関して話し合うことができた。お昼の集いを行うために、ZoomとWebexとLineの使用を試み、その結果、賛美の音楽的質を維持するためにZoomを用いることとなった。

感染防止のため一緒に集まることが出来ず、その中で礼拝の賛美を撮影することは難しい挑戦であったが、パート毎で単独に録音・撮影した音源を編集ソフトで合わせることで対応した。司会、聖書朗読、宗教主任からの説教も、それぞれ撮影をしてデータをオンラインで共有し、学生は、音楽の録音撮影から動画編集まで自分たちで行った。また、大学ゴスベル・クワイアとも協力して執り行われる礼拝もあった。後期からは短大礼拝堂で限られたチームメンバーが集い、感染防止対策を取った上でライブ撮影することもできた。大学オンライン礼拝のために、合わせて9回のコンテンポラリー礼拝動画をチームとして作成することができた。

対面礼拝ができない状況が続いていた中で、奉仕者が減少したことが重要な課題であった。今までワーシップチームに参加し、コンテンポラリー礼拝で奉仕することによって、奉仕者も満たされるという経験があったが、礼拝動画作

成の奉仕のみではそのような経験を与えることができなかったと考えられる。今年度はコロナ禍の影響により、チームが礼拝動画作成の作業に追われた一方で、一緒に礼拝をすることによって養われることが足りなかった。大学礼拝へ奉仕することには成功したが、通常の対面礼拝で体験できる要素が欠けたため、長期的には継続困難な状況になったと思われる。

3) キリスト教理解関連科目に関する取り組み

左近 豊

2020年度キリスト教理解関連科目には、後期開講科目も含めて、専任教員13名、非常勤教員24名の計37名が携わることになっていた。3月中旬に、新学期の開始が4月21日に繰り下げられることが決定され、前年度コンビナーの高砂民宣宗教主任より全担当者宛に学期開始時期の繰り下げの連絡がなされた。3月末には、学期の開始の更なる繰り下げ（5月1日。学事暦5月1日～8月13日）と前期の全授業がオンラインによる遠隔授業とする決定がなされ、塩谷大学宗教部長より、青山学院大学教育の根幹をなすキリスト教理解関連科目全体が、極力オンライン教育ツールによる格差が出ないような運用の仕方、手ほどき、情報共有について今年度コンビナーの左近に委託がなされた。

授業配信サイトとしてCisco Systemの「Webex Meeting」、授業支援サイトとして、従来よりの富士通の「コースパワー」の併用が決定されたが、当初は大学情報メディアセンターのサポート体制も十分ではなく、Webexの用法については、Cisco System社の提供する解説動画などで情報収集に努め、4月1日に科目担当者全員に向けて、「遠隔授業の手引き（1）」を発信し、Webexサイトの用法、および授業の際の基本的な操作についてお伝えした。多くの非常勤の先生方から、Webexへのアクセスに用いるAoyamaメールを普段使っていないことから、メールボックスへのアクセスの困難やパスワードの再発行の手続き等の問い合わせがあり、情報メディアセンターに赴いて対応に当たった。特に英語開講科目担当の日本語を母国語としない先生方にとっての情報格差による不安と当惑への対応が必要とされた。（また後期のみ担当の先生方には、大学よりのWebexのアクティベーション通知メールが7月末まで発行されず、具体的な事前準備にさえ入ることのできない不便を忍耐いただくこととなった）。

4月3日には、「遠隔授業の手引き（2）」を発信し、オンライン授業についてはリアルタイム型だけでなく、オンデマンド型も認められたことをお知らせ

せし、特にオンデマンド型の授業の条件について文部科学省の見解を踏まえてお伝えした。併せてオンライン授業において、担当者にとって関心の高かった出席管理、期末試験などについてコースパワーの機能について説明を添えた。

4月6日には「遠隔授業の手引き（3）」を発信し、オンライン授業における資料引用に関する著作権関連の文化庁と教育機関の諸見解を踏まえた情報、および、キリスト教関連科目担当者のためのオンライン説明会を2回開催する旨をお伝えした。4月8日には「遠隔授業の手引き（4）」に、本学のオンラインに詳しい教員がまとめたオンライン授業のガイドを添付して配信した。

「キリスト教理解関連科目担当者説明会」の第1回は、4月10日16時～、第2回は4月14日16時～、Zoomを用いて行った。これまでも授業でコースパワーを活用してこられたシュー先生による説明が行われた。両説明会ともに25名以上の参加者があり、不安の緩和に役立った旨の感謝が多く寄せられた。

4月12日には全学的にオンライン授業支援の体制が整ったため、「キリスト教理解関連科目」担当者向け独自のガイダンスとしては最後の「遠隔授業の手引き（最終）」を発信し、情報メディアセンターによるWebexとコースパワーの利用説明会（4月16日と17日、午前、午後2回ずつ計4回）開催についてと、図書館活用についてお伝えした。

4月14日の説明会の場で、購買会での教科書販売、およびシラバス修正期間に関するアナウンスを行った。教科書については、伊藤宗教主任から出版元の教文館の担当者を紹介いただき、当初、Amazonや楽天などの全国へのオンライン販売ルートへの供給確保についても確認したが、購買会が既に相当数の在庫を保持し、4月末にはオンラインでの販売・無料配送を請け負うことが分かり、購買会からの購入を履修学生に勧めることとした。

4月中旬より、青山学院大学の教育の基であるキリスト教理解関連科目の位置づけからも、担当される非常勤講師の方々の中で、限られた環境下オンライン授業準備をされる方々への経済支援の必要について他大学の例を参照しながら検討を始め、高砂宗教主任が青山スタンダード機構の責任者と折衝し、前期

授業担当の非常勤講師に30,000円程度を上限とする機器等購入費の支出が可能となる目算を得て、4月30日に担当者宛に案内を送付した。

5月1日より前期授業が開始されたが、初日からコースパワーへのアクセス集中による緊急利用停止事案が発生し、コースパワー上に提示されていたWebexのURLへのアクセスが不可能となってリアルタイム授業に学生に参加できない事態が多発し、翌日に及んだ。この事態を受けて5月2日午前中に非常勤の先生方に、コースパワーの不具合に関する現状と情報メディアセンターによる対応、最初の数回分の授業についての出欠席や授業形態等に関する柔軟な対応のお願いを発信した。5月1日、2日の授業に関しては「キリスト教理解関連科目」を含めて全学的に混乱に見舞われたが、その中で2日午前中のキリスト教概論担当の非常勤の教員から、臨機応変な対応により、Webexにて授業を行われた旨の報告もあり、4月来の説明会や情報共有への感謝が述べられたことは慰めであった。

5月半ば以降からは、比較的安定的にオンライン授業が行われ、試行錯誤を経て得られた知恵やツールについての情報共有も随時なされた。

全国的に大学でのオンライン授業について、マスコミ等で様々な反応が報じられるようになった6月頃、本学の学生相談センターや教職員にも、受講学生や保護者からの相談や意見が寄せられるようになり、「キリスト教理解関連科目」担当者間で、現状把握や情報交換の場を求める声もあり、6月30日に「2020年度第一回キリスト教理解関連科目担当者懇談会－オンライン授業の現状と対策－困ったこと、気づかれたこと……」を、Zoomを用いて15:00～17:00の時間枠内、途中入退室を自由として開催した。当日のプログラムと担当は以下の通り。

開会祈祷・司会（左近）

大学宗教部長より（塩谷）

懇談への導入（大島、伊藤、福嶋）

懇談 Breakout機能により4～5名のグループ懇談

閉会祈祷（高砂）

およそ25名ほどの参加があった。前期の折り返しの時期に開かれた懇談会を通して、直面していた困難解決への糸口を得たり、受講生の状況や要望を把握し、新たな対応の可能性を探る機会ともなった。

8月24日の前期成績提出期限をもって前期は終了した。「キリスト教理解関連科目」担当の先生方のオンライン授業への協力と忍耐、そして何よりも、時が良くても悪くても主イエス・キリストの福音に仕えるお一人お一人の召命に打たれて、感謝の思い溢れる学期であった。

4) 宗教センター 所属4団体

A. ACF (青山キリスト教学生会)

吉岡康子

2020年度のACFの取り組みについて、役員がまとめた活動報告、祈りをもとに報告する。ACFの定期活動として、「まじらん（青山キャンパス）」「ちゃぺらん（相模原キャンパス）」と、5限後に集まって賛美やバイブルクラスなどを行う「じょいふる（青山キャンパス）」「めぐみタイム（相模原キャンパス）」を行ってきたが、オンラインで実施日・実施時間を変更しつつZoomを使用したリアルタイム型の活動を実施した。後期からは、月曜日に行っていた配信を、Zoomを使用してお互い話せるように変更したことでより支部活動に近づけた。

支部活動以外にも、役員会、ワーキンググループの活動や会員企画もオンラインでできることをそれぞれ模索しながら活動した。新歓行事（オープンクラブやバーベキュー）や合宿、学園祭参加などは中止とせざるを得なかった。これらの影響として、直接お互いを知りあう機会が極端に減ってしまったこと、特に1年生へのアプローチが難しかった点があげられている。

またオンラインで「ACFからの外部向け賛美」Teleworshipが配信された。それぞれの場所で録音し、編集して動画を作成したもので、「やり直しがきいてしまうが故の難しさであったり、会衆と一緒に賛美できないさみしさ」を感じたが、オンラインだからこそ人数やキャンパスを気にせずにチームを組むことができたことなどが良い点としてあげられた。今年度は短大・大学オンライン礼拝が実施されたが、学生による企画・賛美が発信されたことは、同じく困難な状況にある学生たちへの良き証と励ましとなった。

以下、オンラインの活動をとおしてACF役員が気づいたこと、祈りを紹介する。

「オンラインになり、今まで当たり前のように思っていたことがどれだけ恵

まれた環境であったか気づかされた、これまでやってきたことがそのままできないという難しさがあり、どうすればいいかわからないこともたくさんある、逆にそのことが、私たちが頼るべきは主ただ御一方であるということも教えてくれる、困難な時期ではあるが、だからこそ今できることはなにかを考えACF一丸となって協力し合い、ともに神様を見上げていけたらと思う。

困難な状況ではあるが、その中でACFが誰かにとっての心の支えになればと思う。ACFの活動を通して神様のことを感じ取れればもっと幸いである。また、青学生の中でつらい気持ちなどを抱えている人たちに寄り添えるようなACFであってほしいと思う。これからもACFが神様に用いられるような団体であり続けられるように、そしてACFのメンバー一人ひとりや今困難を抱えているすべての人が神様からのお守りがあるように、祈りに覚えていただければ幸いである」(2020年度ACF役員 田口 瑞紀)

B. 聖歌隊

藤原淳賀

新型コロナウイルス対策のため、2020年3月から聖歌隊のすべての活動が止まった。毎年3月中旬に行われる合宿をキャンセルし、それ以降の活動は、学位授与式、入学式での奉唱も含め、すべて止まった。

以下、2020年度、できなかったこと、新たに始めたこと、音楽活動、そして今後の活動への準備について記しておく。

できなくなったこと

3月25日の学位授与式、4月1日の入学式がキャンセルされたため、そこでの奉唱の機会はなかった。これらは大学聖歌隊として毎年恒例の大きな奉仕の場である。特に入学式での奉唱は、新入生の勧誘の点からも、大きなアピールの機会でもあり、これを失ったのは大きな痛手であった。もちろん、キャンパス閉鎖のため、毎年新年度初頭にキャンパスで行われる新入生勧誘の機会は、他の団体と同様に、持つことができなかった。

新型コロナ感染の観点から、共に歌うということは、最も危険なことであるとされた。共に集まれず、もし集まれたとしても、共に歌えないということは、聖歌隊の意気消沈にも繋がり、大きなダメージとなる可能性があった。

新たに始めたこと

このような状況の中で、新たに始めたこともある。2020年度の活動が大幅に制限されることが予想されていた2020年3月には、新入生募集を念頭に、活動紹介動画を作成した。またSNSで新入生にアピールを行った。すぐに功を奏したわけではないが、できる準備は行ったという隊員の気持ちの共有はモチベーションを保つ上で有益であった。

また毎週水曜日に聖歌隊隊員同士のオンライン交流会（Zoom）を持つようにした（毎週水曜日17:00-）。事務連絡も大きな目的だったが、コロナが収まったときに、再び共に歌うというモチベーションを下げないように、毎週顔を合わせる交わりは有益であった。

大学礼拝は、2020年度の始まりからオンラインで行ってきている。その中で、過去に収録してあった映像を用いて、聖歌隊のオンライン奉唱として参加することができた。

変わらず行えたこと

例年同様に、宗教主任による週一回の聖書研究会を行った。ただしオンライン（Zoom）を使った形で行った。青山キャンパスの学生がほとんどの聖歌隊において、相模原キャンパスの宗教主任は関わる機会が少ないのだが、オンラインであったため、今年は指導をすることができた。昼休みの前半に聖書を学び、後半は参加者の交わりのときとした（木曜12:30-13:20）。

学生たちは、食事をしながら静かに聞いている。時々質問をすると答えるが、基本的には静かに聞いている。このようなスタイルがやりやすいのだろうと思う。

音楽活動

定期演奏会のための曲は決まっている。またボイス・トレーナーから、練習のための音源も学生たちに定期的に送られてきており、個人練習は行われている。

る。また個別のボイス・トレーニングもZoom等で行われている。ただ一人暮らしをしている隊員は自宅で大きな声を出すことができない。個人練習には差があるのが現状である。

今後の活動への準備

秋に入り、状況が落ち着けば、共に歌う練習が可能になるかもしれない。そのようなことを期待しながら、2020年度、夏までの時期を過ごしている。今後、クリスマス点火祭（オンライン）、クリスマス礼拝（オンライン）のための奉仕の機会が聖歌隊に与えられることを願いつつ、奉唱の準備を進めている。

C. 2020年度の大学ハンドベル・クワイアの活動について

大宮 謙

2020年度の大学ハンドベル・クワイアの活動が、例年とは全く異なる環境の中、それでもコーチ（指揮者）の鷺晶子先生、隊長の柿原春香さんを始め、クワイア・メンバーの真摯な取り組みと宗教センターを始め多くの方々のご協力によって、守られ、支えられていることを、まずは感謝をもって報告させていただきます。その上で、以下、時系列で活動を報告させていただきます。

4月には、まずコーチの鷺先生、3年生4名全員によるオンライン会議で今後の方針について話し合い、下旬にオンラインでの練習を2回行うことができました。1回の練習は1時間を目途としました。コーチ、全学生に加えてチャプレンの高砂民宣宗教主任と私も加わり、チャプレンによる聖書朗読、ショートメッセージ、祈りに始まり、近況報告をしたり、画面共有しながらの譜読みなどを行いました。また、新入生の勧誘、演奏旅行などについても話し合いました。この時期は、オンラインでの技術的トラブルなどもありましたが、お互いの安否を確認し合いながらの活動となりました。

5月は、4月に引き続き、週に1回程度、オンライン練習をコーチ、全学生、チャプレンで行いました。チャプレンによる聖書朗読、ショートメッセー

ジ、祈りの後、次第にチャブレンは一旦、退出する形となり、コーチ、学生が譜読みなどを行い、最後に再びチャブレンが加わって、夏の演奏旅行などについて話し合いました。ベルが手元に無い中での練習に、ある種のもどかしさもあったのではないかと思います。

6月には、オンライン練習が毎週土曜日11:30~12:30で固定化され、コーチと学生で行う形に移行しました。チャブレンとの連絡は、主には、コーチ、隊長とのSNSグループで適宜行いました。新入生向けのオンライン説明会が3回行われ、新入生2名の参加がありました。毎年9月に開催してきたオール青山ハンドベル・コンサートについては、学生からは規模を縮小してでも何とか開催したいという強い希望がありましたが、学院宗教主任会で感染状況に鑑み中止せざるを得ないという結論となりました。

7月には、引き続きオンライン練習が行われる中、大学・短大オンライン礼拝での奉鐘を7月、8月の2回、2019年の日本基督教団使徒教会でのコンサートでの動画を編集する形で献げることができました。曲は、7月はHymn of Praise、8月はAll Creatures of Our God and Kingです。

8月には数回のオンライン・ミーティングを行いました。

9月はオンライン練習を継続する中で、新入生1名を迎えることができ、たいへん嬉しい出来事でした。また、当初の予算の変更を大学宗教主任会で認めていただき、リモート練習にも使用する目的でチャイム（Malmark社製、3オクターブ、37チャイム、ケース2個）を購入し、9月下旬に各自の家庭に宅配しました。このチャイムを使用した大学・短大オンライン礼拝での奉鐘（曲はAmazing Grace）が1月に献げられる予定です。

10月の相模原祭、11月の青山祭はいずれもオンライン開催でしたので、演奏動画をそれぞれ提出しました。

10月からは、ようやく対面練習が毎週水・土曜日13:00~16:00、間島記念館3階集会室にて始まりしました。家での検温、練習の前後の手指消毒、マスク着用、換気、お互いの距離を取ることを守りながらの練習再開です。そして、オンライン点火祭（青山キャンパス）のための演奏動画撮影、クリスマス・チャ

ペルコンサートの動画配信、大学クリスマス礼拝（短大チャペル）での奉鐘（オンライン同時配信）、青山学院ハンドベル・クワイアオンラインコンサートの青学TVでの配信と、例年とは異なる形ではありますが、奉鐘、演奏の機会が与えられ感謝しています。また、動画配信であるからこそ、より多くの方にハンドベルの音色をお届けする機会ともなりました。

また1月の大学・短大オンライン礼拝での奉鐘は、もう1度（曲はCanticle of Hope）献げられる予定です。

ハンドベルという楽器で演奏することから、一方では、なかなかオンライン環境で自宅で手元に楽器をもって練習することが困難な中で、もどかしさを味わうことになりましたが、他方では、楽器で演奏することから、いち早く対面練習を再開することができる幸いを味わうことにもなりました。

D. コロナ禍のゴスペル・クワイアの歩み

福嶋裕子

2020年2月17-19日、二泊三日の春合宿は例年通りに山中湖畔にて行われた。この時、コロナに関するニュースを聞いてはいたが、それはまだ遠い中国の武漢での出来事だと捉えていたように思う。例年通りに合宿中に新役員での役員会が行われたが、コロナの「コ」の字もなかった。

しかし3月中旬より、活動や練習後の学生たちの会食が禁じられ、練習中にもこまめにうがいをするなどの勧告がなされるようになった。さらに3月の終わりにオンライン授業が決定し、キャンパス内への学生・教職員の立ち入りが厳しく制限されてはじめて、コロナ禍の現実と直面した。年間計画の見直し、さらに対面練習の中止という事態へ追い込まれ、3月の役員会（Zoom）では新歓の計画も予想も立たない現状で、どうすればよいのかと知恵を絞ることになった。

幸い今年度の隊長、副隊長、会計、コンマス、ディレクターといった役員たちが落ち着いて、率直な疑問を担当宗教主任の三名（福嶋、シュエ土戸、森

島)に投げかけてくれた。宗教主任としても予測でしか答えることができなかったが、ひとまずゴスペルのコンサートや新歓の計画について「最悪、妥当、最善」の事態に対応して三つのシナリオを立てること、また公式Line、Twitter、Instagram、YouTubeアカウントを通して興味のある新入生にゴスペル・クワイアを知ってもらい、オンラインで練習を続けることが決まった。Lineでは新入生と一対一のトークで質問ができ、Twitter、Instagramでは質問箱から質問を受け付けることができる仕組みである。

新入生の登録に関しては、森島先生のアイデアで、コースパワー上で青学の学生であることを確認した上で、入隊を認めていくことになった。今年度の入隊者は前期で八名、最終的には九名(年間)となった。

春のコンサートを始め、すべての対面式のコンサートが中止と決定された。この状態で後期のクリスマス・コンサートについては動画配信という方向性が強くなってきた。ここでも学生たちは知恵を出し合い、「枠にとらわれない」ということで新しいPCを宗教センターの助成金で購入することを話し合った。その理由は二つある。第一は、実はコロナにはまったく関係がない。従来、ゴスペルはコンサートのをカラオケ音源で賄ってきたが、ゴスペル・クワイア専用のPCは存在せず、クワイアはiPodだけを所持して来た。従って、毎年、その年の役員の私用のiTunesを使用していたが、一度、一つのデバイスに繋いだデータを他のデバイスに繋ぐと消えてしまうという問題点があった。つまりiPod内のiTunesのデータを管理するためというのが第一の理由である。第二の理由が、コロナに直結したもので、例えば隊員が自宅でそれぞれに撮影し、それらの動画を重ね合わせて一つの動画にするためには、高度な動画編集が可能なPCを必要とする。そのためマックブック・プロをFinal Cutアプリ付きで購入することを役員の学生たちは考えたのである。いわば、コロナに押し出されての決断だった。

マックブック・プロ、しかもFinal Cut付きの購入案は、4月3日の時点で、会計よりゴスペル担当の三名の宗教主任たちに提案された。学生たちが早くからオンラインの練習とコンサートを真剣に考えていたことがわかる。

しかし大学宗教主任会では、年間の予算計画を変更して今年だけのこととして助成金で高額なPCをゴスペル・クワイアが購入することに対して疑義が提出された。だがこれまでのゴスペルの活動とコロナの状況を総合して考えると、PCの購入は必要であることから、宗教主任会で審議の結果、承認となった。だがマックブック・プロの購入手続きにはさまざまな困難があり、宗教センター職員の方々にたいへんお世話になった。

さらにPCの管理規則を作成する際、助成金で購入したマックブック・プロをクワイアの代表として使用する個々の学生の責任の重さについて、担当宗教主任たちと学生のあいだで幾度か討論を重ねていった。最終的に担当宗教主任（今年度はシュー土戸先生）の研究室をPCの保管場所とし、マックの受け渡しの際には使用者が貸し出し記録と誓約書にサインするという形式に落ち着いた。学生たちがコンサートのための動画編集作業などに入るとき、学内だけでのPC使用では意味がないからである。良い道具を購入した以上、最大限に駆使すべきだが、もちろん学生がその責任の重大さを自覚した上でということになる。隊員が正式の受け渡しを経て、初めてマックブック・プロを手にしたのは7月1日である。

コロナ禍にあって気持ちが萎縮するときもあったであろうことは容易に想像できるが、隊員たちは冷静な判断をとって来たと言える。コンテンプラリーのオンライン礼拝でもゴスペル・クワイアはvirtual choir動画での奉唱ができた。（前期は6月10日、曲は「After This」後期は12月16日「Silent Night」）。忍耐を強いられた特別な一年だったことだけは間違いない。最後になったが、リモート練習という慣れない中、クワイアを指導してくださったケン・ティラー先生に感謝したい。

5) キリスト教推薦会～経済学部への対応を中心に

大島 力

青山学院大学には各学部にはキリスト教推薦入試で入学した学生たちの会があり、在学中、様々な活動をしている。聖書の学び、読書会、あるいは相互の信仰における交わり等、学部、あるいは大学全体の中でのキリスト教活動の拠点ともいえるべき役割を果たしている。

しかし、この活動も4月以降、学内に集まることが出来ないため、最初からどのような形で進めるかという課題に直面した。

例年であれば「キリスト教推薦生オリエンテーション」が年度初めに行われて、新入生を迎えて活動が始まっていたが、今年は中止になり、各推薦会の判断で対応することになった。経済学部の推薦会「ピステイス」は4月20日になって、学部の宗教委員の協力もあり、「新入生歓迎ミーティング」をオンラインで行うことができた。内容は経済学部で学ぶための入門、年度聖句解説、自己紹介であった。新入生10名と役員6名のみの参加であったが、これが今年度の活動の出発点となった。

その後、役員をはじめ在校生が動き始め、延期されていた前年度の総会を行い、新年度の役員を正式に選出することができた（4月27日）。また、役員会において活動方針を決め、隔週月曜日6時限の時間帯にオンラインで例会を行うことを決定した。内容は、一人の学生の信仰の証を全体で聞き、その後グループに分かれ、証で紹介された聖書箇所について分かち合いをする、というものであった。

最初はオンラインのため戸惑うことも多かったが、在校生（2～4年生）がリードして会を進め、次第に新入生も積極的に発言するようになっていった。毎回の活動は20～30名であり、新入生にとっては同級生と語り合える貴重な機会、2～4年生にとってはお互いの近況を知る機会となったのである。オンライン例会であるので課題はあるが、共に祈り、聖書の言葉に聞く時として、8

月3日まで、計7回の例会を行った。ちなみに、その時に取り挙げられた聖書の箇所を記しておきたい。2年生、3年生の役員7名が毎回、次のような聖書箇所では信仰の証をし、それを分かち合えたことは、この時期に貴重なことであつたように思うからである。

マタイ18：20、Ⅱコリント12：9-10、ヨハネ15：16、イザヤ41：10、マタイ6：34、Ⅰコリント10：13、ローマ12：18-21

これらの聖書箇所は、各人が洗礼を受けたきっかけとなった箇所であることが多く、その後のグループミーティングで、全員が自分の信仰を語り、また近況を聖書の言葉と結び付けて促すことに繋がっていったと言える。

2020年度のピステイスの主題聖句は「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ18：20）であった。この箇所は、新型コロナウイルス感染が広がる前に決まっていたのであるが、たとえ少人数であっても、またオンラインの集まりであっても、イエスの名によって集まる者があればイエス・キリストが共にいてくださるという約束である。このことが、4月から8月の活動において証されたことは幸いであつた。

2020年度後期もオンライン授業が継続される。従って、各学部のキリスト教推薦会の活動もオンラインが中心になる。しかし、やはり実際に間島記念館の集会室に集まって会をしたいという希望が強いのは事実である。オンラインで繋がることと、実際に集まって集会をすることの相互関係が、ポストコロナの時代には課題になるのではないかと考えられる。

2020. 8. 4 記

6) オンライン聖書研究会の可能性

高砂民宣

未曾有の状況下で始まった2020年度。私は「聖書に親しむ会」(通年)を毎週金曜日の昼休みに、そして「キリスト教文化に親しむ会」(前期のみ)を毎週水曜日の昼休みにオンラインで行いました。

①「聖書の集い」

私は今年度、「聖書に親しむ会」を「イエス・キリストとの出会い」というテーマで行いました。けれども新約聖書に限らず、時には旧約聖書の「ルツ記」(マタイによる福音書の「イエス・キリストの系図」の中にルツの名前が記されている)を取り上げる等、比較的自由に聖書箇所を選んで学びました。登録者数は11名ですが、毎回の平均参加人数は7名ほどでした。

参加した学部生たちの中には、北海道や鳥取県など、故郷に一時帰省している人もいました。けれどもオンライン「聖書に親しむ会」を通して、場所は離れていても、お互いの状況を確認することができました。週報などのお知らせ欄には、開催時間が昼休み中の12時40分から13時10分までの30分間と記されていますが、いつも終了時刻は14時前後となるほど、話は尽きませんでした。

今年度特筆すべき点は、大学院の国際マネジメント研究科の新入生が3名、オンライン「聖書に親しむ会」に参加したことです。いずれもフレックスタイム制で学びを始めた人たちで、その日によって自宅から、或いは会社から、オンライン聖研に参加してくれました。これまでは「聖書に親しむ会」が昼休みに対面式で開催されていたこともあり、参加者は学部生が中心でした。仕事を終えて夕方からキャンパスに来て学び始める院生の人たちは、「聖書に親しむ会」に参加することが出来なかったのです。しかしこの度のコロナ禍によって、在宅勤務となった院生も、オンラインゆえに「聖書に親しむ会」に参加できるようになりました。そして緊急事態宣言が解除され、再び会社に出勤するようになってからも、オンライン「聖書に親しむ会」に参加し続けてくれまし

た。少し大袈裟かもしれませんが、私はここに、人間の思いを超えた神さまの不思議な導きを感じました。また、特に嬉しかったのは、その中から1名、自宅の近くにある教会の礼拝に出席するようになった院生が現れたことです。（この院生はその後も教会の礼拝に出席し続け、2020年12月20日のクリスマス礼拝で洗礼を受け、教会の現住陪餐会員（正会員）となりました。）オンライン「聖書に親しむ会」が教会と大学とのパイプ役を少しでも務めることができたことを、心から感謝しています。

②「キリスト教文化に親しむ会」

今年度、私は「キリスト教文化に親しむ会」を「キリスト教の教理に学ぶ」というテーマで行いました。以前は「使徒信条」をテーマに取り上げたこともありましたが、今年度は故 熊沢義宣先生が著された『聖霊の信仰』をテキストとして、三位一体の教理に関する学びを行いました。この本をテキストに選んだ理由は、例年の参加者の中から、「父なる神、そして子なる神であるイエス・キリストについては分かるが、どうも聖霊についてはよく分からない」という声があったからです。新約聖書の中には、「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」と明記されています（コリントの信徒への手紙Ⅰ 第12章3節）。それゆえ、イエス・キリストへの信仰は、聖霊の働きを抜きにしては成立しないのです。幸いにもテキストとして選んだ『聖霊の信仰』には、旧約聖書と新約聖書の視点から、さらに教理的視点から、聖霊について簡潔に記されていて、とても有益な学びをすることができました。参加者の中には、このテキストを発行している東京神学大学に直接連絡をし、購入した人もいて、熱心に学ぼうとする姿勢に驚かされました。こちらの「キリスト教文化に親しむ会」も、登録者数は12名、毎回の平均参加人数は約7名で、参加者の顔ぶれは「聖書の集い」とほぼ同じメンバーでした。

今年度から参加した人たちにその理由を尋ねると、「せっかく青山学院に入ったのだから、建学の精神であるキリスト教について学びたいと思ったから」という答えが返ってきました。また、一人の院生は、お子さんがキリスト

教の幼稚園に通っている間、保護者向けの聖書の集いがあり、それを機会に聖書に関心を持つようになったそうです。この話を聞いて、キリスト教の教育機関を通しての伝道の大切さと可能性について改めて痛感しました。

新型コロナウイルスによる異例の状況下で始まったオンライン聖書研究会。小さな群れですが、想定外の恵みをもたらしてくれています。学部生と院生が共に参加することによって、年齢を超えた交わりや意見交換がなされています。時にはディスカッションが盛り上がり、次の会議に遅刻してしまうのではないかとハラハラする時もありました。また、社会経験を踏まえた院生の発言には、教えられることが多くあり、学部生は大きな刺激を受けているようです。

使徒言行録の8章には、ステファノの殉教を皮切りに、エルサレムの教会に對して大迫害が起こり、使徒たちの他は皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行ったと記されています。けれども散って行った人々は福音を告げ知らせながら巡り歩き、結果的には大勢の人々にキリストが宣べ伝えられることに発展して行きました。そのように、神さまは私たち人間の思いを超える仕方で、最善の道を備えてくださる。コロナ禍にあって、オンラインという仕方で、学部生だけでなく、院生も聖研に参加する道を切り開いてくださった。この大いなる恵みに感謝して、微力ながらもキャンパスミニストリーの一端を担う者でありたいと祈ります。

7) 宗教センター発行メールマガジン

森島 豊

新型コロナウイルス対応により、3月上旬の時点では大学の授業開始を2週間遅らせた4月21日に延期することとなっていた。その時点では、オンライン授業（当初は遠隔授業と呼称）の実施は、状況が見通せないことと技術的な面から最終決定されていなかった。大学執行部の方でオンライン授業が確定されたのは3月31日で、授業開始日が5月1日と決定された。また、当初は5月の連休明けには対面授業が可能になるのではとの楽観的な見方もあった。いずれにしても、5月の授業開始までに空白状態が生じ、例年形成されていた宗教センターに関わる学生たち（新入生や4団体、推薦会の役員やメンバー）のモチベーションと求心力の低下に対応する必要があった。

3月30日塩谷直也宗教部長から、上記の課題に対応するため、「宗センメールマガジン（当時の仮称、以後メルマガ）」を作り、毎週月曜日に配信して、人々の気持ちを少しでもつなげられる情報発信の提案・依頼を受けた。メルマガを担当したのは、宗教主任の森島豊、宗教センター職員の佐々木潤と奥井正司である。

発行時期は、当初4月第二週から当時予想されていた対面授業が始まる直前の週（5月第一週）までと予定していたが、最終的に前期すべてがオンライン授業となったため、8月第三週まで続き、合計18号発行した。

発行形式は、最初PDFで行っていたが、Line等で連絡を取り合っている諸団体には不向きであった。そこで伊藤悟宗教主任からMicrosoft Office Swayというソフトウェアを使用して、web形式でも発信することができた。

配信対象は宗教センター四団体メンバー、推薦会メンバー、宗教主任に限定していたが、のちに学院長と大学宗教委員にも配信した。配信対象を限定して、大学全体に広げなかった理由は、内容と目的が宗教センター関係の学生たちの交わりを中心とするものだったからである。

内容は、巻頭言、今週の聖句（週報記載と同じ）、礼拝動画、自肅中におすすめの映画や書物・音楽の紹介、宗教センタースタッフ紹介であった。巻頭言は最後まで宗教主任が担当することとなった。内容も堅苦しいものではなく、不安と緊張の中にある学生の心をほぐすものであった。たとえばイースターの時期に重なっていた第二号の巻頭言は以下のものであった。

家にいる時間が増えたこの頃、皆さんはどのようにお過ごしでしょうか。コロナウイルスのニュースばかりで気が滅入っていませんか？そういえば、主イエスの弟子たちもイースターの日まで部屋にこもっていましたね。いろいろな噂に気が滅入っていたでしょう。少しテレビやSNSから離れて、Good Newsを聴きたいですね。忙しい日々に読みたい本がありませんでしたか？時間ができたら観たいと思っていた映画がありませんでしたか？こんな時に他のキリスト者たちはどのように過ごしているのでしょうか。そんな情報も含めて皆さんにお届けいたします。

メルマガの内容は、次第に四団体の活動の様子や読者からの投稿が寄せられた。特に、宗教委員からおすすめ映画や本また祈りの言葉が寄稿された。他にもオルガニストから礼拝の前奏曲と後奏曲について解説が載せられた。毎回の「あとがき」は編集実務を担当した佐々木潤が心休まる一言を載せてくれた。

総じて、メルマガは孤立しがちな自肅期間の学生たちに自宅で過ごす良い情報と心を落ち着かせる映画や書物などを提供し、キャンパスミニストリーに関わる教員学生の良き交わりの場となっていた。

8) 青山学院の各部の礼拝・聖書メッセージの発信に関して

—幼稚園・初等部・中等部・高等部—

大島 カ

大学のキリスト教活動と共に、青山学全体においては2020年4月以降、各部がそれぞれの状況に応じて、園児・児童・生徒、また保護者の方々に聖書のメッセージを伝えてきた。以下は、キャンパス閉鎖期間（4－5月）の簡略な報告である。（なお、その当時の様子を伝えるため、文体・形式は各部で異なっているが、ご容赦願いたい）

<幼稚園>

幼稚園は、主に以下の2点を行なっています。

- 1、平日の毎日15時に、メールで、続きのお話、讃美歌、歌、誕生日の方の名前、クイズ等を配信していますが、このメールの最後に必ずお祈りを入れています。メール自体は長いので、お祈りの部分だけですがある日のメール配信のお祈りのスクリーンショットを添付いたします。
- 2、週に一度、おたよりと付録を郵送しています。付録はイースターの絵本等キリスト教の絵本であったり、保育者の手作りの「青山学院幼稚園すごろく」であったり、植物の種であったり、様々です。このお便りはA4で4枚分です。1枚目は必ず聖書のお話を入れています。保護者に読み聞かせてもらうことを想定して書いています。聖書のお話の下の部分には、子どもたちに向けて担任が一人ひとりに個人的に手紙を書いています。

その他、保育者が讃美歌を自作したものや、手話による聖書の言葉等をおたよりに載せています。聖書のお話は、保育者が自身で必死に聖書研究をして書いています。

参照：幼稚園「おたより5月号 その1」（石橋主事担当）

＜初等部＞

・礼拝について

4月6日（月）より、月～金曜日、毎日朝8時にネット礼拝を配信。（ゴールデンウィークなどは除く）マイクロソフト社のSharepointとStreamをつかっているため、初等部外からのアクセスができないようになっています。動画はStream上に保存し、それぞれ朝アクセス。礼拝動画は、これまで26日分がアップされている。説教はすべて宗教主任が担当。

・今後の展開

初等部としては、7月末までは、かりに部分登校が可能になったとしても、礼拝堂での一斉礼拝の実施には時期尚早と判断している。そこで、ネット配信礼拝を7月末までは準備する予定。5月18日（月）以降は、説教・奨励者を宗教主任だけでなく、初等部長、と信徒教員を含め進めていく予定。また、Webexを使用したオンライン指導が可能になったので、「オンライン讃美礼拝」「オンライン祈祷会」を企画中。

「オンライン祈祷会」は、子どもの声として、自分の両親が医者で、コロナ対応をしているので、祈ってほしいというものがあつたりするので、祈りの課題を募集したり、祈りの言葉そのものを集め、空間は別になっても、時を合わせて祈ることを大切にして祈祷会を実施してみたい。

・保護者向け（大人向け）のコンテンツ

保護者向けに「みことばと祈り」というコンテンツを立ち上げていて、プリントアウトするとA4一枚に収まる文章を配信している。

・スクールカウンセラー対応を稼働する予定。家庭学習が続き、子どもたちも保護者もストレスが溜まっているので、今できる方法を模索中です。

初等部全体としては、4月6日以降にアップされた授業関係の動画は486本。PDFコンテンツは1980作成している。

参照：初等部「ネット礼拝のスクリーンショット」（小澤宗教主任所有）

<中等部>

中等部ではイースター明けより、週の冒頭にコースパワーを用いて毎週、各生徒と保護者向けに礼拝メッセージを配信しています。今のこの時期、とにかく御言葉に触れてもらいたい、何かを感じてもらいたいという一心で取り組んでいます。従って特にレスポンスを求めるとか課題を課してはおりません。

参照：「礼拝メッセージ配信（初回）」（浅原宗教主任発信）

<高等部>

高等部の礼拝について。

高等部では、授業がある毎朝8時に、B5サイズの紙に聖句と短いメッセージを書いたものを生徒にGoogleクラスルームを通じて配信しています。生徒はそれを読み黙想の時間をもったら、Googleフォームというアンケートアプリケーションを使って12時30分までに入力します。その統計を毎日としています。

参照：「メディテーションタイム」（山元宗教主任発信）